

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第18集

# 西曾根 *NISISONE*

長野県佐久市岩村田西曾根遺跡発掘調査報告書

1992. 3

佐久市土地開発公社  
佐久市教育委員会  
佐久埋蔵文化財調査センター

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第18集

# 西曾根 *NISISONE*

長野県佐久市岩村田西曾根遺跡発掘調査報告書

1992. 3

佐久市土地開発公社  
佐久市教育委員会  
佐久埋蔵文化財調査センター



西曾遺跡とその周辺（株式会社協同測量社撮影）

## 【例 言】

1 本書は佐久市土地開発公社による雇用促進住宅建設事業に伴う、栗毛坂遺跡群西曾根遺跡の発掘調査報告書である。

2 調査委託者 佐久市土地開発公社

3 調査受託者 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4 発掘調査所在地地籍

栗毛坂遺跡群西曾根遺跡（略称 I K N S）

佐久市大字岩村田字西曾根62地

5 調査期間および面積

平成元年6月26日～平成4年3月31日

面積 7,000㎡

6 調査体制

平成元年度

（事務局）佐久埋蔵文化財調査センター

所 長 西沢 正巳

庶務係長 島山 俊彦

調 査 係 高村 博文、三石 宗一、小山 岳夫、小林 眞寿、翠川 泰弘  
助川 朋広

（調査団）

団 長 黒岩 忠男

調査担当者 翠川 泰弘

調査補助員 小林 幸子、木島 美子

調査協力者 青木あさ代、荒井 かつ、荒井ふみ子、江口まさえ、金沢 花子  
木内 明美、小林とめの、小林まさ子、酒井 豊子、佐藤 玉枝  
高橋かね子、高橋 恒代、高橋 ふみ、高橋 冬子、高橋 良市  
武井 豊子、角田 すい、中山いつ代、中山たのし、中山弥太郎  
中山 雪子、花岡美津子、樋沢しづい、星野 保彦、矢野きく江

平成2年度

（事務局）佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

教 育 長	大井 季夫
教 育 次 長	小池 八郎
佐久市開発公社事務局長	須江 吉介
埋蔵文化財課長	
埋蔵文化財センター所長	相沢 幸男
管 理 係 長	桜井 牧子
管 理 係	東城 公人
埋蔵文化財係	高村 博文、林 幸彦、三石 宗一、須藤 隆可 小山 岳夫、小林 眞寿、羽毛田卓也、翠川 康弘 竹原 学、助川 朋広

(調査団)

団 長	黒岩忠男
副 団 長	白倉 盛男・藤沢 平治
調 査 担 当 者	翠川 康弘

平成3年度

(事務局) 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

教 育 長	大井 季夫
教 育 次 長	奥原 秀雄
佐久市開発公社事務局長	
埋蔵文化財課長	
埋蔵文化財センター所長	上原 正秀
管 理 係 長	桜井 牧子
埋蔵文化財係長	草間 芳行
埋蔵文化財係	高村 博文、林 幸彦、三石 宗一、須藤 隆可 小林 眞寿、羽毛田卓也、竹原 学
調 査 担 当 者	小林 眞寿

- 7 本書の原稿執筆はIIを白倉盛男が、他の全ての原稿と編集は翠川泰弘・小林眞寿が行った。
- 8 本書に掲載された写真のうち遺物写真は島山俊彦が撮影し、他は翠川泰弘が撮影した。
- 9 本書に関する全ての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

## 【凡 例】

- 1 遺構の略称 住居址→H 掘立柱建物址→F 土坑→D 井戸址→Q
- 2 図面上の方位は真北を用いた。
- 3 標高は縮尺尺度の上に明記した。
- 4 遺構実測図に用いたスクリントーンは、斜線-地山 砂目-黄土 網点-粘土を表現している。
- 5 遺物実測図に用いたスクリントーンは、須恵器を表現している。
- 6 本書で表現している色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に基づいている。

## 【目 次】

口絵

例言

凡例

I 発掘調査の経緯	1
1 発掘調査に至る動機	1
2 調査日誌	3
II 遺跡の環境	4
1 自然環境	4
2 層序	6
III 調査の成果	8
1 竪穴住居址	8
2 掘立柱建物址	16
3 井戸址	35
4 土坑	35
5 遺構外出土の遺物	38
IV まとめ	39

引用・参考文献

図版

## 【挿図目次】

第1図	西曾根遺跡の位置と周辺遺跡の分布	1	第19図	第6号掘立柱建物址実測図	22
第2図	浅間火山の形態構造図	4	第20図	第7号掘立柱建物址実測図	23
第3図	浅間山麓地形図	5	第21図	第8号掘立柱建物址実測図	24
第4図	基本順序模式図	6	第22図	第9号掘立柱建物址実測図	25
第5図	西曾根遺跡発掘区設定図	7	第23図	第10号掘立柱建物址実測図	26
第6図	西曾根遺跡グリッド設定図	8	第24図	第11号掘立柱建物址実測図	27
第7図	西曾根遺跡位置図	9	第25図	第12号掘立柱建物址実測図	28
第8図	西曾根遺跡遺構全体図	9	第26図	第13号掘立柱建物址実測図	29
第9図	第1号住居址実測図	11	第27図	第13号掘立柱建物址出土土器実測図	30
第10図	第1号住居址出土土器実測図(1)	12	第28図	第14号掘立柱建物址実測図	31
第11図	第1号住居址出土土器実測図(2)	13	第29図	第15号掘立柱建物址実測図	32
第12図	第2号住居址実測図	14	第30図	第16号掘立柱建物址実測図	33
第13図	第2号住居址出土土器実測図	15	第31図	第17号掘立柱建物址実測図	34
第14図	第1号掘立柱建物址実測図	17	第32図	第1号井戸址実測図	35
第15図	第2号掘立柱建物址実測図	18	第33図	第1号井戸址出土土器実測	35
第16図	第3号掘立柱建物址実測図	19	第34図	第1・2・3号土坑実測図	36
第17図	第4号掘立柱建物址実測図	20	第35図	第4・5号土坑実測図	37
第18図	第5号掘立柱建物址実測図	21	第36図	遺構外出土土器実測図	38

# 第 I 章 発掘調査の経緯

## 第 1 節 発掘調査に至る動機

西曾根遺跡は佐久市大字岩村田に所在し、標高744m内外の田切り地形に扶まれた台地上に立地している。

過去遺跡群内においては、佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター・長野県埋蔵文化財センターにより、柳田遺跡・芝間遺跡・前藤部遺跡・栗毛坂遺跡A・B・C地区・中曾根遺跡群等の発掘調査が実施されており、遺跡群の様相が明らかになってきている。西曾根遺跡は昭和63年度佐久市教育委員会によって実施された試掘調査結果から、奈良時代を中心とする遺跡であることが予想された。

今回、本遺跡内において、佐久市土地開発公社による雇用促進住宅造成事業が計画されたため、試掘調査が実施された。その結果、遺構・遺物が検出され、本調査を実施する必要性が生じた。そこで佐久市教育委員会が佐久市土地開発公社より委託をうけ、佐久市教育委員会より委託をうけた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を行う運びとなった。



第 1 図 西曾根遺跡の位置と周辺遺跡の分布



No	佐分No	遺 跡 名	No	佐分No	遺 跡 名
1		西曾根遺跡	26	7-3	若宮遺跡
2		栗毛坂遺跡A	27		森下遺跡
3		栗毛坂遺跡B	28	29-1	西近津遺跡
4		栗毛坂遺跡C	29	6-1	北近津遺跡
5		栗毛坂遺跡D	30	13	皎月古墳
6		栗毛坂遺跡E	31	12	中金井遺跡群
7		栗毛坂遺跡F	32	11	跡坂遺跡群
8		芝間遺跡	33	14	島原古墳
9		東赤産遺跡(2次)	34	15	からむし古墳
10		西赤産遺跡	35	53	濱石古墳
11	42	中久保田遺跡	36	54	濱石遺跡
12	41	枇杷坂遺跡	37	10	栗毛坂遺跡群
13	52-1	六供後遺跡	38	44	上岩子遺跡
14		上大林遺跡	39	52	岩村田遺跡群
15		下聖端遺跡	40	541	曾根新城跡
16		上聖端遺跡	41	45	新城遺跡
17		聖原遺跡I	42	9	長土呂遺跡群
18		聖原遺跡II	43	40	長土呂館跡
19		下芝宮遺跡	44	8	芝宮遺跡群
20		南上中原・南下中原遺跡	45	4	曾根城跡
21	8-1	芝宮遺跡(第1次)	46	538	曾根城遺跡
22	8-2	芝宮遺跡(第2次)	47	7	周防畑遺跡群
23	8-3	芝宮遺跡(第3次)	48	29	西近津遺跡群
24	7-1	周防畑A遺跡	49	6	北近津遺跡群
25	7-2	周防畑B遺跡			

第1表 周辺遺跡一覧表

## 第 2 節 調査日誌

平成元年

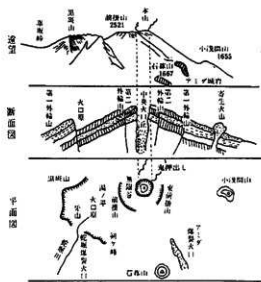
- 6月26日 重機による表土削平。地表下約1mの深さでビット群があらわれる。午後より検出作業に着手する。
- 27日 重機による表土削平。湧水が激しいため調査区の周囲に排水溝を掘る。ビット群・土坑が検出される。
- 29日 重機による表土削平。ビット群が掘立柱建物址を構成することが明らかとなる。
- 30日 重機による表土削平。遺構の掘り下げに着手する。
- 7月1日 重機による表土削平。遺構の掘り下げ。検出。
- 3日 重機による表土削平。遺構の掘り下げ。実測。検出。
- 4日 重機による表土削平。遺構の掘り下げ。実測。検出。
- 5日 重機による表土削平。遺構の掘り下げ。
- 6日 重機による表土削平。
- 7日 遺構の掘り下げ。実測。検出。
- 11日 排土置き場になっていた部分の土砂を運び出し調査に着手する。
- 12日～14日 重機による表土削平。
- 20日～25日 遺構の掘り下げ。実測。検出。
- 26日～28日 遺構の掘り下げ。実測。
- 29日 実測。
- 31日 遺構の掘り下げ。実測。
- 8月2日 遺構の掘り下げ。実測。
- 3日 遺構の掘り下げ。実測。
- 4日 実測。
- 5日 遺構の掘り下げ。実測。現場での調査終了。
- 8月8日～11日 重機による埋め戻し。

～平成4年3月 報告書作成。

## 第II章 遺跡の環境

### 第1節 自然環境

千曲川最上流部の標高700m内外の流域にあたる佐久平は、行政区分では大部分佐久市に属し、気候冷涼な高原盆地として一括して見られている。南方佐久山地の秩父多摩国立公園に属する甲武信ヶ岳から源を発する千曲川は佐久山地と西南側南八ヶ岳方面からの小支流を合わせて北流して、佐久町付近で水量と川幅を増し、流域平地を広めて、臼田町付近に至って佐久平と称せられ平湿地となり、佐久市の中心部を北に貫流して小諸市に流出している。この千曲川の流域に広がっている東西幅約6km、長さ約15kmの南北に長い菱形の標高660m～740m地域が佐久平である。

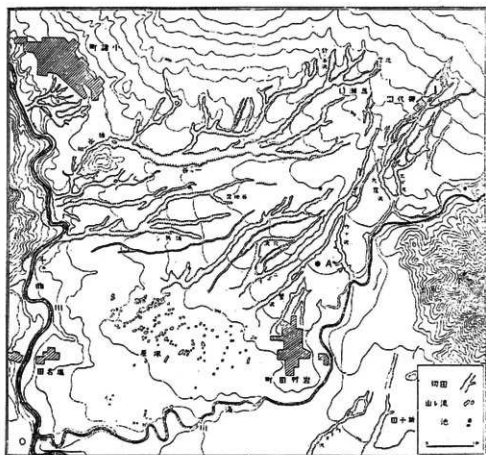


第2図 浅間火山の形態構造図(白倉原図)

この佐久平は地形地質の成因的には二大別され、佐久市の中心部を東西に流路を持つ滑津川を境として著しい差異が認められる。この境界がかつては旧南北佐久郡境にもなっていたが現在は三町一村の郡境を越えた合併による佐久市の新しい誕生によって消滅した。しかし自然条件は依然として明らかに残されており、南北の差は大きいものがある。滑津川以南の佐久平は千曲川流域沖積層地帯で標高680m内外の平湿地で千曲川とその支流の用水を活用した水田地帯である。滑津川以北は千曲川右岸にあたり、北部県境にそびえている浅間火山の堆積物分布地帯で標高700m内外と一段高台をなしている。浅間火山はわが国の火山としては最も新しい三重式成層火山で、現在も活動を続けている典型的な火山で佐久平北半分はその噴出物に被われている。その噴出物堆積層の南縁部は旧岩村田町・中込原にまで及んでいる。

この噴出物は、黒斑火山の長期に亘る火山活動の火山弾火山灰砂礫が空中堆積したもので、浅間山南麓一体の軽井沢-小諸地域、最南縁は中込原まで厚い堆積層を作っている。佐久市北部の火山堆積物は全てこれに属し、第一軽石流(P1)第二軽石流(P2)の二期に大別され、小諸

懐古園・鼻頭船荷付近でその厚層を見ることが出来る。この軽石流の堆積時期は内部に含まれている自然木炭によるC14の測定によって $10,650 \pm 250$  YBP 洪積期終期とされている。この堆積層は主として火山灰砂礫浮石によって構成されているため水の浸食に弱く山麓緩傾斜地では水流洪水に浸食され、御代田・三岡付近では火山地特有の「田切り地形」が見事に発達し、長土呂・小田井にまで及んでいる。田切り地形の底を流れる小流は弥生期の水田開発に活用されたものもあるようである。



1) 塚原泥流堆積物の泥流丘の分布を示す。2) 軽石流堆積物に刻まれた特徴的な谷地形 (田切り) を示す。八木 (1936, P.79) の図を転載。A……西曾根遺跡

第3図 浅間山麓地形図

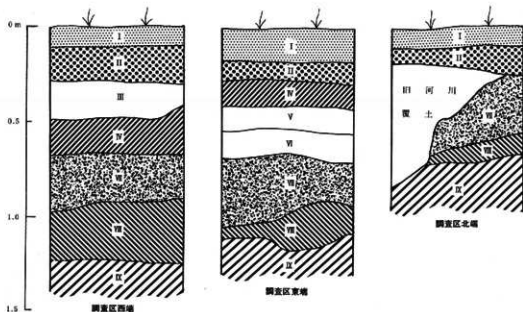
## 第2節 層序

西曾根遺跡における基本層序の観察は、調査区の西端・東端・北端の3カ所で行った。その結果は以下の通りである。

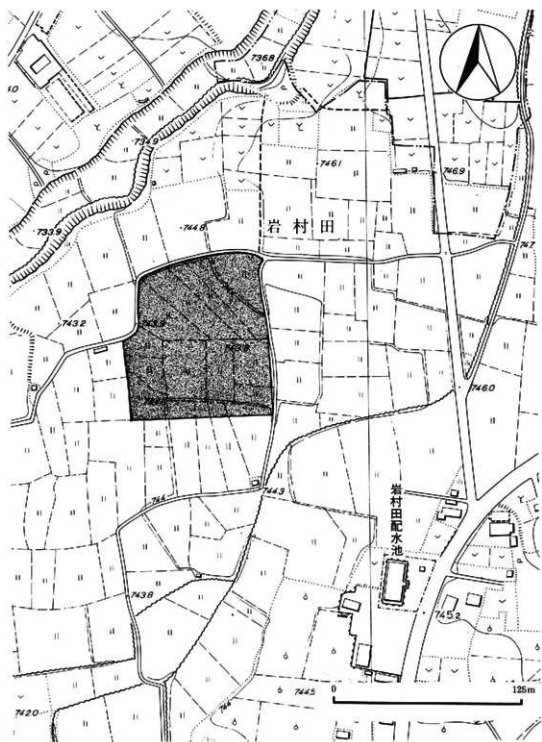
- I層—10YR4/2、水田耕作土。
- II層—7.5YR4/6、水田床土。
- III層—7.5YR3/2、黒褐色粘質土層。  
φ3mm前後の炭化物少含。
- IV層—7.5YR3/3、暗褐色粘質土層。  
炭化材少含。
- V層—7.5YR4/6、水田床土。
- VI層—10YR4/2、灰黄褐色土層。
- VII層—10YR2/2、黒褐色粘質土層。
- VIII層—10YR5/8、ロームとV層の混在土層。
- IX層—10YR5/8、ローム層。



基本層序西(東より)



第4図 基本層序模式図



第5図 西曾根遺跡発掘区設定図（1：2,500佐久市基本図4による）

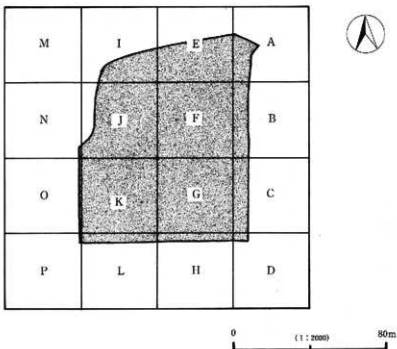
### 第三章 調査の成果

#### 第1節 竪穴住居址

##### 第1号住居址

##### 遺構（第9図）

本址は調査区の中央やや東の位置で検出された。他遺構との重複関係は一切認められなかった。南北7.2m、東西7.3mの隅丸方形ブの壁高は平均25cmを測る。覆土は自然堆積である。北壁中央に構築されたカマドと相対する南壁下中央には出入口と思われる不定形な掘込みが認められる。また、所謂「壁溝」がカマド部分を除く壁下を全周している。柱穴はP1～P4の4基が均等位置に配置されており、P5～P8の存在から上屋の建て替えが行われたことが推測される。カマドは石芯を粘土で被覆した、所謂「石組粘土カマド」である。遺物はカマドの東脇から東北コーナーにかけて集中して出土している。

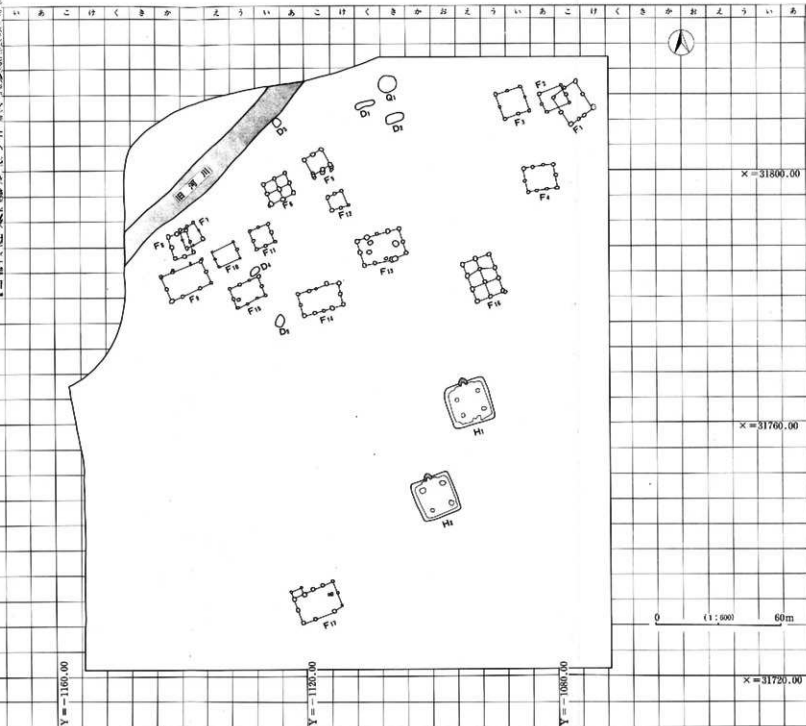


第6図 西普根遺跡グリッド設定図



第7図 西曾根遺跡位置図

0  
7  
8  
9  
10  
1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10  
1  
2



第8図 西曾根遺跡遺構全体図



#### 遺物（第10～11図）

須恵器・土師器が出土している。須恵器9点、土師器11点の計20点を図化した。

須恵器の器種には、無台・有台の坏、坏蓋、甕が認められる。坏のロクロからの切り離しはヘラにより行われている。1は坏蓋のつまみ、2～4は無台の坏、5～7は有台の坏、11～12は甕である。

土師器の器種には、杯・甕・甌が認められる。坏は全て非ロクロ成形で丸底を呈する。甕は13・15～18のような所謂「武蔵甕」的なものと、14・19のような古墳時代的なものが出土している。

#### 第2号住居址

##### 遺構（第12図）

本址はH1号住居址の南西8mの位置で検出された。他遺構との重複関係は有さない。南北－6.5m、東西－6.4mの方形プランを呈し、検出面からの壁高は平均30cmを測る。覆土は自然堆積である。カマドは北壁中央に構築されており、石芯を粘土で被覆した所謂「石組粘土カマド」である。カマド部分を除く壁下には、所謂「壁溝」が全周している。柱穴はP1～P4の4基が均等位置に配置されている。

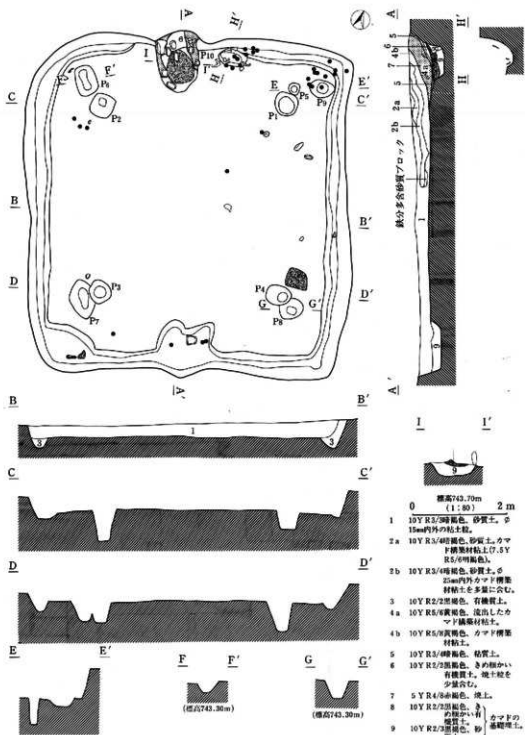
住居址中央部の、カマド前方において集中して出土したカマド構築材と思われる破群は、本址床面には達しておらず、第2層中に包含されており本址に帰属するものではない。

##### 遺物（第13図）

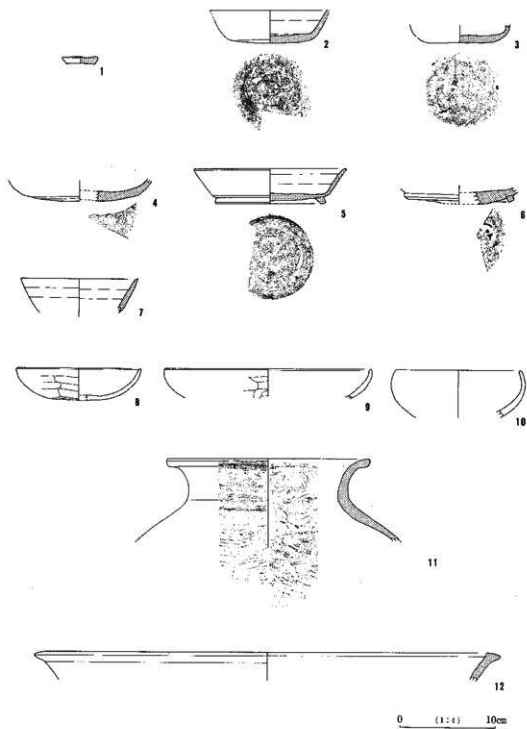
須恵器・土師器が出土している。須恵器5点、土師器2点の計7点を図化した。

須恵器の器種には、坏、甕、小型広口壺が認められる。坏のロクロからの切り離しはヘラにより行われている。1～2は無台の坏、3は小型の広口壺、4・7は甕の破片である。

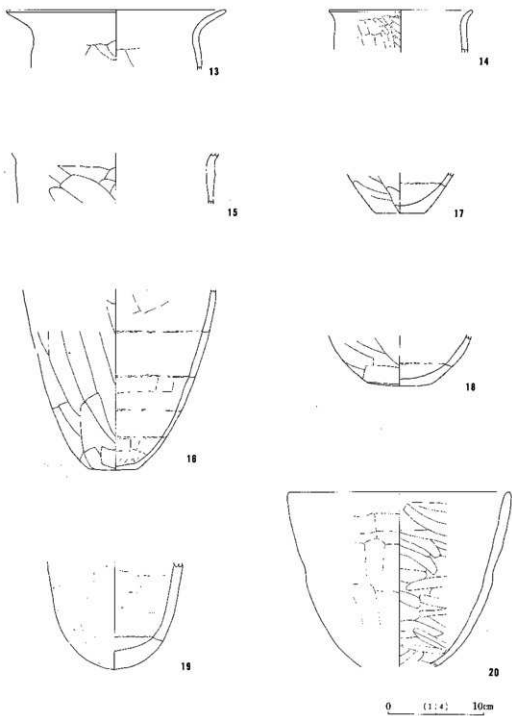
土師器の器種は甕のみが認められ、5・6ともに所謂「武蔵甕」である。



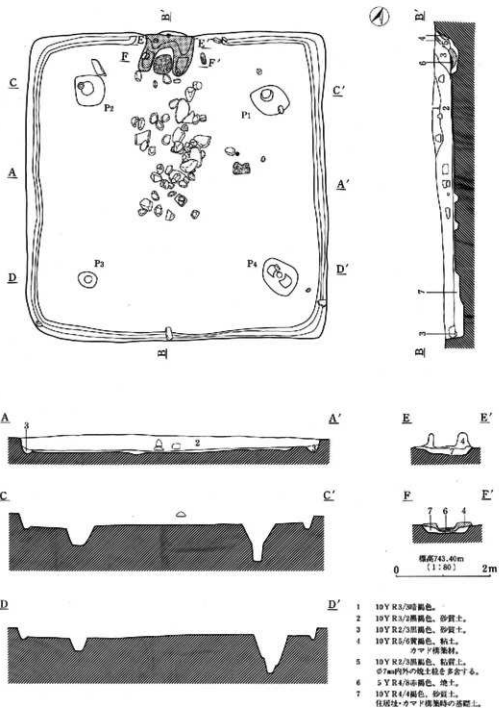
第9図 第1号住居址実測図



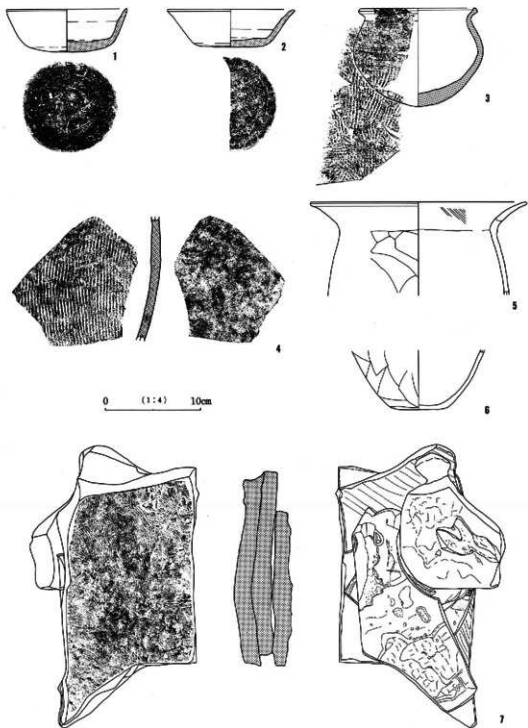
第10图 第1号住居址出土土器实测图(1)



第11图 第1号住居址出土土器实测图(2)



第12図 第2号住居址実測図



第13图 第2号住居址出土土器实测图

## 第2節 掘立柱建物址

### 第1号掘立柱建物址 (第14図)

本址は、調査区北東隅において検出された。第2号掘立柱建物址と重複関係が認められるものの、柱穴自体の重複は存在しないため、新旧関係は不明である。

長軸をN-34°-Wにとり、東西-5.24m、南北-4.5mの2間×2間(南辺のみ3間)の規模を有する。各柱穴は平均67×62cmの楕円ないし方形を呈し、検出面から33~58cmの深さを有する。出土遺物は皆無であった。

### 第2号掘立柱建物址 (第15図)

本址は、調査区の北東隅において検出され、第1号掘立柱建物址と重複関係を有するが、新旧関係は不明である。

長軸をN-68°-Eにとり、東西-3.7m、南北-3mの1間×2間の規模を有する。各柱穴は平均52×50cmの円形を呈し、検出面から50cm前後の深さを有する。柱痕は直径12cm前後の円形である。出土遺物は皆無であった。

### 第3号掘立柱建物址 (第16図)

本址は、調査区の北東隅において、第2号掘立柱建物址の2m西方で検出された。他遺構との重複関係は有さない。

長軸をN-24°-Wにとり、東西-4m、南北-4.1mの2間×2間の規模を有する。各柱穴は平均51×44cmの楕円ないし円形を呈し、検出面から26~58cmの深さを有する。柱痕は、直径12cm前後の円形である。出土遺物は皆無であった。

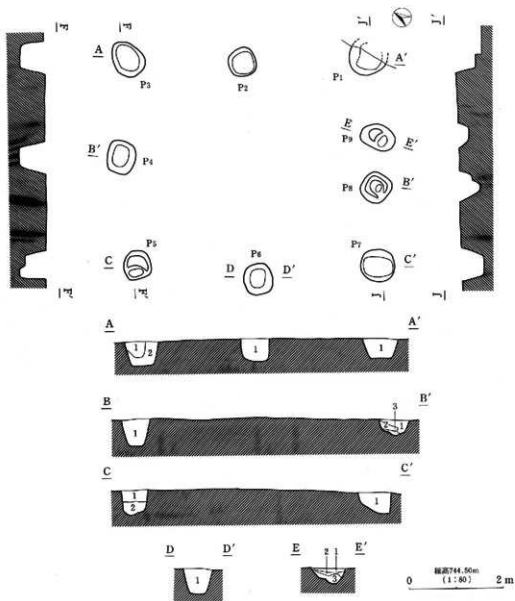
### 第4号掘立柱建物址 (第17図)

本址は、調査区の北東隅において、第3号掘立柱建物址の7m南方で検出された。他遺構との重複関係は有さない。

長軸をN-83°-Eにとり、東西-4.8m、南北-4mの3間×2間の規模を有する。各柱穴は平均63×58cmの楕円ないし円形を呈し、検出面から32~42cmの深さを有する。柱痕は、直径15cm前後の円形である。出土遺物は皆無であった。

### 第5号掘立柱建物址 (第18図)

本址は、北端中央から南方に12mの位置で検出された。他遺構との重複関係は持たないもの



- 1 10Y R2/3 黒褐色、きめ細かい有機質土。
- 2 10Y R3/3 暗紫色、きめ細かい砂質土。  
地山(ローム層)砂粒を多量に含む。
- 3 10Y R2/2 黒褐色、きめ細かい砂質土。  
50mm内外の黒色ブロックを少量含む。

第14図 第1号掘立柱建物址実測図

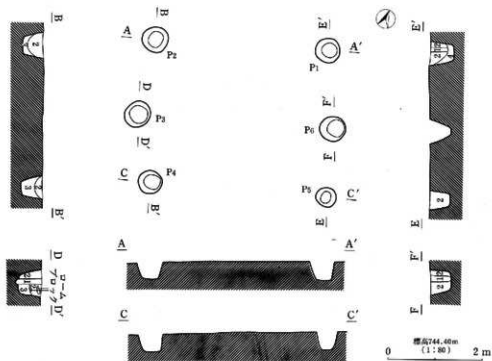


の、本址の南辺を構成するP4～P6の3基は、P7～P11の5基の柱穴とそれぞれが2ないし3回の切り合い関係を有していることから、少なくとも3回の建て替えが行われたものと考えられる。

長軸をN-61°-Eにとり、東西-3m、南北-3mの2間×1間の規模を有する。各柱穴は平均65×60cmの円ないし方形を呈し、検出面から30-50cmの深さを有する。柱痕は直径14cm前後の円形である。出土遺物は皆無であった。

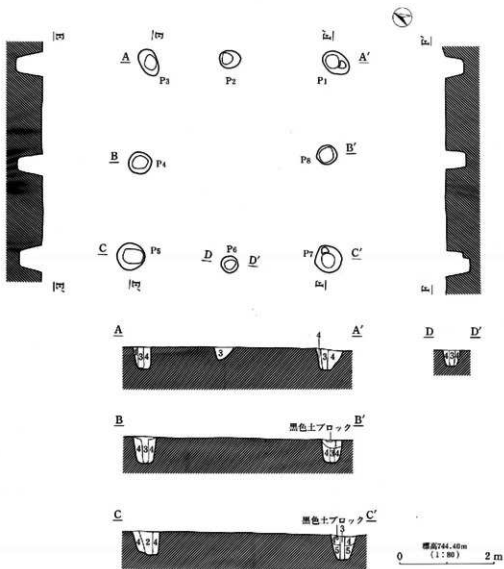
### 第6号掘立柱建物址（第19図）

本址は、第5号掘立柱建物址の西方4mの位置で検出された。他遺構との重複関係は有さない。長軸をN-63°-Eにとり、東西-3.9m、南北-3.5mの2間×2間の総柱の掘立柱建物址である。各柱穴は平均66×57cmの楕円ないし円形を呈し、検出面から36-60cmの深さを有する。柱痕は直径20cm前後の円形である。出土遺物は皆無であった。



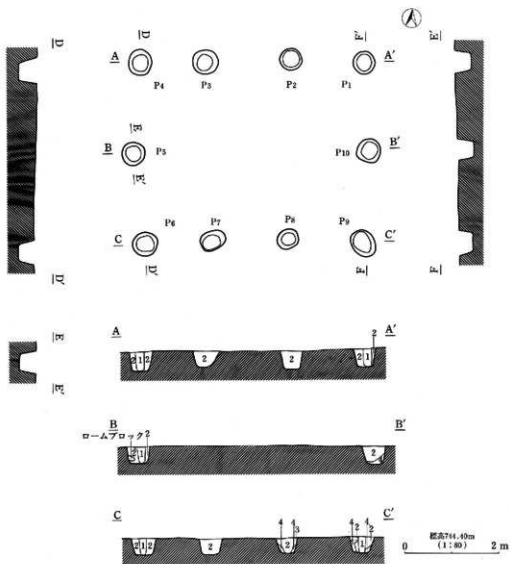
- 1 10Y R2/3 黒褐色、きの細かい砂質土、P1・P2の柱痕。
- 2 10Y R2/2 黒褐色、きの細かい有機質土、65cm内外の黒色土ブロックを含む。
- 3 7.5Y R2/1 灰褐色、きの細かい砂質土。
- 4 10Y R5/4 濃い黄褐色、砂質土、埋伴された地山(ロー層)。

第15図 第2号掘立柱建物址実測図



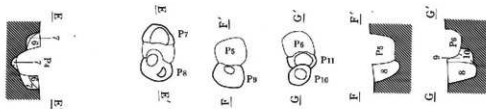
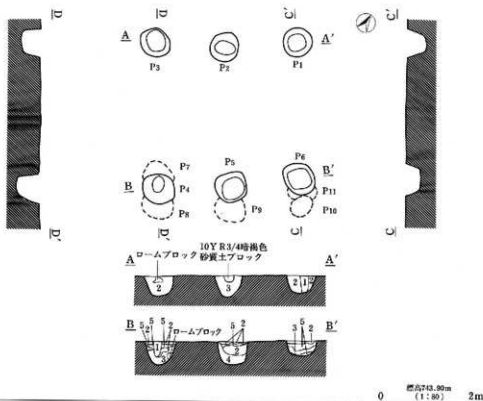
- 1 7.5Y R3/2 黒褐色、砂質土。φ5m内外のローム柱・パミス・黒色土粒を多含する。
- 2 10Y R2/2 黒褐色、砂質土。φ5m内外のローム柱・パミスを多含する。P2の柱状。
- 3 10Y R2/1 黒色、きめ細かい有機質土。P1・P3・P4・P6-P8の柱状。
- 4 10Y R2/3 黒褐色、砂質土。φ5m内外のローム柱・パミスを多含する。

第16図 第3号掘立柱建物址実測図



- 1 10Y R2/3 黒褐色、きめ細かい砂質土。炭化材を少量含む。  
P1-4-6, 9の柱状。
- 2 7.5Y R4/2 灰褐色、粘質土。炭化材を少量含む。P5は明確な人為埋土。
- 3 10Y R3/2 黒褐色、砂質土。2,4層の埋持層。
- 4 10Y R5/6 灰褐色、砂質土。埋持された地山(ローム層)

第17図 第4号掘立柱建物址実測図



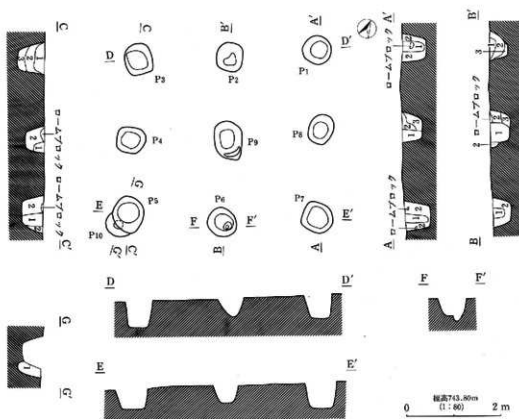
- 1 10Y R2/3黄褐色、ややきめの粗い砂質土。柱状
  - 2 10Y R2/3黄褐色、きめ細かい砂質土。
  - 3 10Y R2/1黄褐色、きめ細かい砂質土。
  - 4 10Y R2/2黒色、きめ細かい有機質土。
  - 5 10Y R4/4黒色、砂質土。埋められた地山(ローム層)を主体とした人為地土。P4は型くしまり有。
  - 6 10Y R3/2黄褐色、砂質土。φ40mm内外のロームブロックを多含する。
  - 7 10Y R2/1黒色、有機質土。
  - 8 10Y R2/3黄褐色、砂質土。地山(ローム層)を主体とした人為地土。
  - 9 10Y R4/3に濃い黄褐色、砂質土。埋められた地山(ローム層)を主体とした人為地土。
  - 10 10Y R3/3黄褐色、砂質土。φ30mm内外の黒色ブロック少量・ローム砂粒を多含する人為地土。
- P1-P6  
P7-P8  
P10  
P11

第18図 第5号掘立柱建物址実測図

### 第7号掘立柱建物址 (第20図)

本址は、調査区の北西隅を横切る旧河川の南方2mの位置で検出された。第8号掘立柱建物址と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

長軸をN-63°-Eにとり、東西-2.8m、南北-3mの2間×2間の規模を有する。各柱穴は平均48×42cmの楕円ないし円形を呈し、検出面から14~40cmの深さを有する。柱痕は確認されず、出土遺物も皆無であった。



- 1 10YR2/2 赤褐色、きめ細かい砂質土。P1, P11-P16の柱痕。
- 2 10YR2/1 黒色、きめ細かい有機質土。
- 3 10YR4/6 褐色、砂質土層、浸淫された地山(ローム層)。

第19図 第6号掘立柱建物址実測図

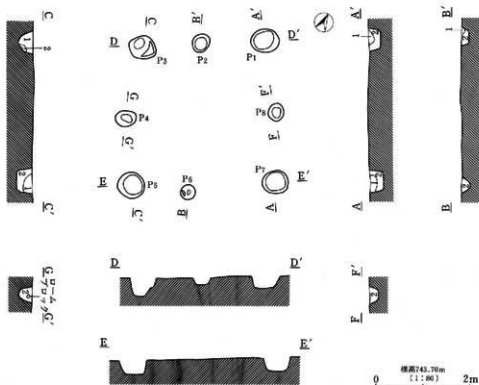
### 第 8 号掘立柱建物址 (第21図)

本址は、第 7 号掘立柱建物址と重複関係を有し、調査区の北西隅を横切る旧河川から南方に 2 m の位置で検出された。第 7 号掘立柱建物址との新旧関係は不明である。

長軸を N-21'-W にとり、東西-3 m、南北-3.7m の 2 間×2 間の規模を有する。各柱穴は平均 69×63cm の楕円・円ないし方形を呈し、検出面から 30~55cm の深さを有する。柱痕は確認されず、出土遺物も皆無である。

### 第 9 号掘立柱建物址 (第22図)

本址は、第 8 号掘立柱建物址の南方 1.8m の位置で検出された。他遺構との重複関係は有さないが、本址の北辺を構成する P1~P4 の 4 基の柱穴は、P11~P14 の 4 基の柱穴とそれぞれ切り合い関係を有しており、少なくとも 1 回の建て替えが行われたものと考えられる。



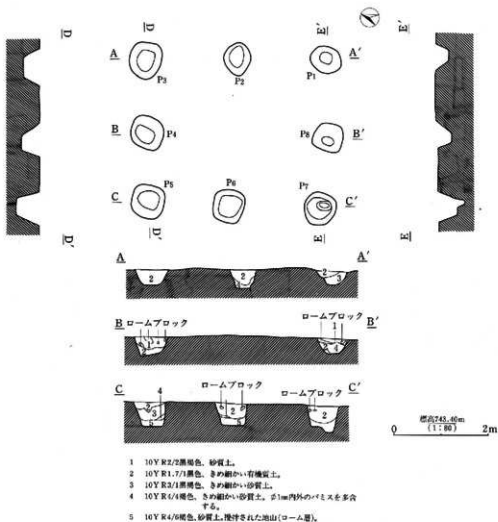
- 1 10Y R1.7/1 褐色、きめ細かい有根質土。炭化材を少量含む。
- 2 10Y R4/3 濃い黄褐色、ややきめの粗い砂質土。埋持された雑草(ローム層)を多量含む。

第20図 第 7 号掘立柱建物址実測図

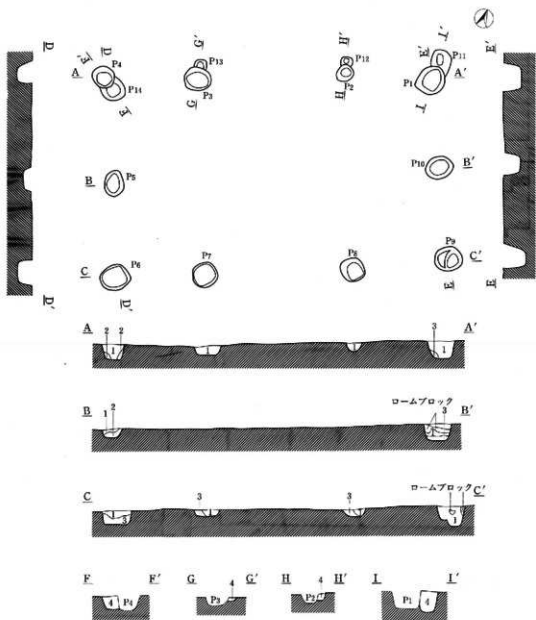
長軸をN-70°-Eにとり、東西-7m、南北-4mの3間×2間の規模を有する。各柱穴は平均52×47cmの楕円ないし円形を呈し、検出面から12~36cmの深さを有する。柱痕は確認されず、出土遺物も皆無であった。

#### 第10号掘立柱建物址（第23図）

本址は、第9号掘立柱建物址の東方2mにおいて検出された。他遺構との重複関係は有さない。長軸をN-66°-Eにとり、東西-3.7m、南北-2.7mの1間×2間の規模を有する。各柱穴は平均37×34cmの楕円ないし円形を呈し、検出面から16~25cmの深さを有する。柱痕は確認されず、出土遺物も皆無であった。



第21図 第8号掘立柱建物址実測図



- 1 10Y R2/1 灰色、Sの細かいい有粒質土、炭化材を少量含む。
- 2 10Y R2/3 赤褐色、砂質土。
- 3 10Y R5/4 に近い黄褐色、砂質土、焼付された土山（ローム層）。
- 4 10Y R2/3 黒褐色、Sの細かいい有粒質土、P11-P14の覆土。

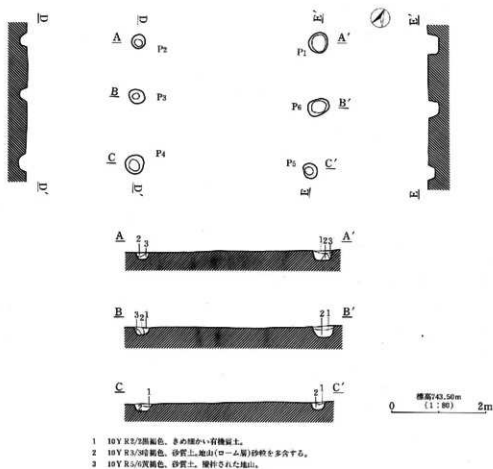
0 北高741.60m  
[1:50] 2m

第22図 第9号独立柱建物址実測図



第11号掘立柱建物址 (第24図)

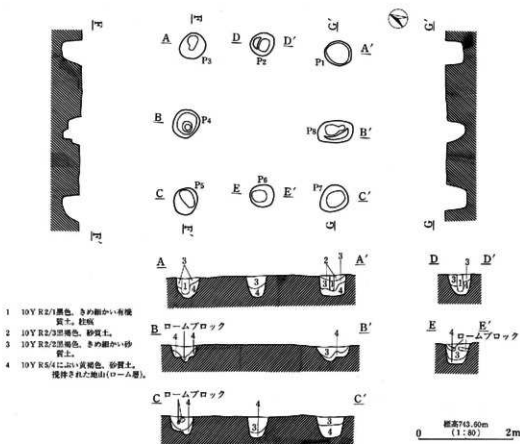
本址は、第10号掘立柱建物址の東方3mの位置で検出された。他遺構との重複関係は有しない。長軸をN-20°-Wにとり、東西-3.1m、南北-3.2mの2間×2間の規模を有する。各柱穴は平均58×50cmの楕円ないし円形を呈し、検出面から32~45cmの深さを有する。柱痕は直径14cm前後の円形を呈する。出土遺物は皆無であった。



第23図 第10号掘立柱建物址実測図

第12号掘立柱建物址 (第25図)

本址は、第3号掘立柱建物址の南方4mの位置で検出された。他遺構との重複関係は有さない。長軸をN-65°-Eにとり、東西-2.6m、南北-2.5mの2間×1間の規模有する。各柱穴は平均58×56cmの円ないし方形を呈し、検出面から36~56cmの深さを有する。柱痕は直径14cm前後の円形を呈する。出土遺物は皆無であった。

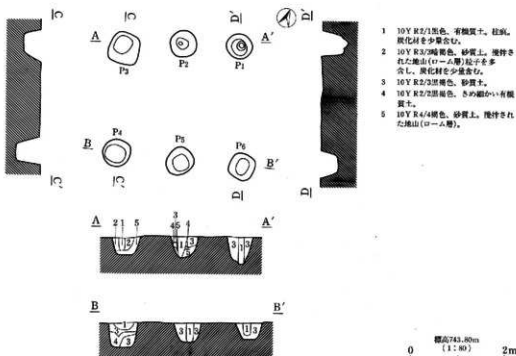


第24図 第11号掘立柱建物址実測図

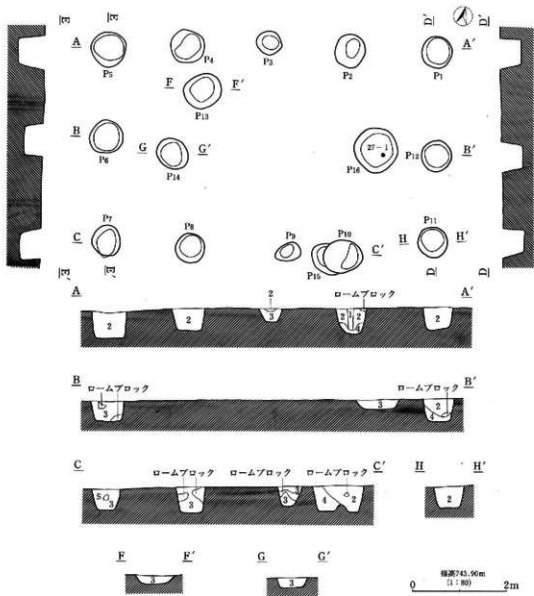
第13号掘立柱建物址 (第26~27図)

本址は、第12号掘立柱建物址の南方6mの位置で検出された。P13・P15と重複関係を有しており、P15を切っている。

長軸をN-74°-Eにとり、東西-6.9m、南北-4mの4間×2間の規模を有する。各柱穴は平均66×62cmの楕円ないし円形を呈し、検出面から20~58cmの深さを有する。柱痕は確認されなかった。本址は柱穴とは考えにくいP14・P16をP6-P12間に有しており、他の掘立柱建物址とは異なった構造・性格を有するのかもしれない。出土遺物は手捏の土師器(第27図-1)が1点出土している。



第25図 第13号掘立柱建物址実測図



- 1 10Y R2/2暗褐色、砂質土、P2の柱穴。
- 2 10Y R7/1黒色、きめ細かい有機質土。
- 3 10Y R2/1黒色、砂質土。
- 4 10Y R5/4に2.5~1.5頁褐色、砂質土、埋没された地山(ローム層)。

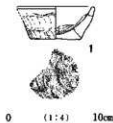
第26図 第13号掘立柱建物址実測図

#### 第14号掘立柱建物址（第28図）

本址は、第12号掘立柱建物址の南方12mの位置で検出された。

他遺構との重複関係は有さない。

長軸をN-75°-Eにとり、東西-6.5m、南北-3.5mの4間×2間の規模を有する。各柱穴は平均58×54cmの円形を呈し、検出面から32~68cmの深さを有する。柱痕は確認されなかった。本址は北東隅に位置するP1が東西に対しては南に、南北に対しては東にずれて構築されている。これは偶然ではなく、構造上の理由による故意であるように思われる。出土遺物は皆無であった。



第27図

#### 第15号掘立柱建物址（第29図）

本址は、第10号掘立柱建物址の南方4mの位置で検出された。P11と重複関係を有するが、新旧関係は不明である。

長軸をN-66°-Eにとり、東西-5m、南北-3.3mの3間×2間の規模を有する。各柱穴は平均44×41cmの楕円ないし円形を呈し、検出面から18~44cmの深さを有する。柱痕は10cm前後の円形を呈する。出土遺物は皆無であった。

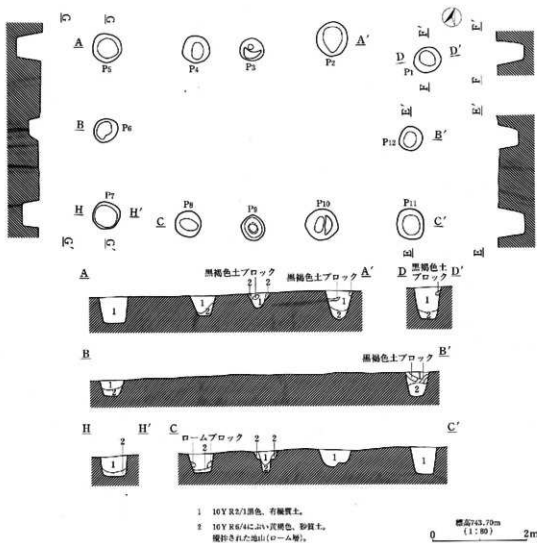
#### 第16号掘立柱建物址（第30図）

本址は、第1号住居址の北方12mの位置で検出された。P13を切って構築されている。

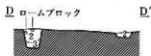
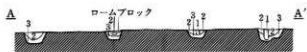
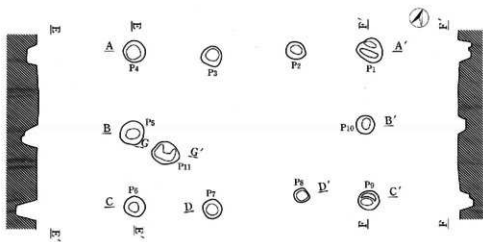
長軸をN-22°-Wにとり、東西-4.6m、南北-6.5mの2間×3間の規模を有する総柱の掘立柱建物址である。各柱穴は平均72×68cmの円形を呈し、検出面から40~60cmの深さを有する。柱痕は直径14cm前後の円形を呈する。出土遺物は皆無であった。

#### 第17号掘立柱建物址（第31図）

本址は、調査区南端中央から8m北方の位置で検出された。他遺構との重複関係は有さない。長軸をN-65°-Eにとり、本址の主体と考えられる、P2~P9で区画される部分で東西-5.2m、南北-4.1mを測る。これにP1・P10~P13を加えた東西は6.8m、P14~P15を加えた南北は5.6mを測る。基本的には3間×2間の掘立柱建物址に、東に1間、北は部分的に1間を加えた掘立柱建物址と考えられる。各柱穴は平均61×56cmの円ないし方形を呈し、検出面から10~30cmの深さを有する。柱痕は確認されず、出土遺物も皆無であった。



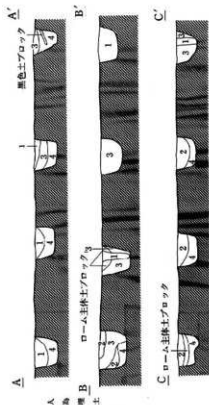
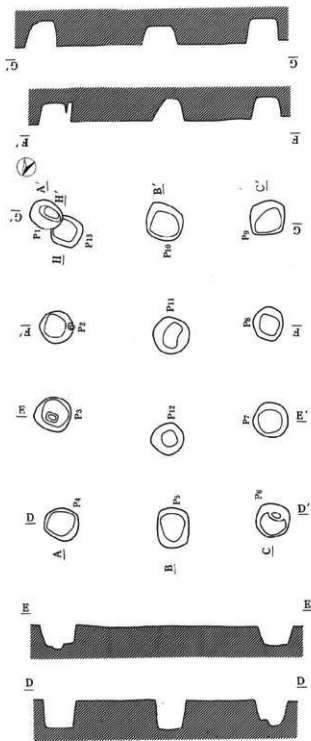
第28図 第14号独立柱建物址実面図



標高743.50m  
(1:80) 2m

- 1 10Y R2/2 赤褐色、その細かい砂質土、柱状。
- 2 10Y R2/1 褐色、その細かい石塊質土、炭化材を少量含む。
- 3 10Y R5/4 濃い黄褐色、砂質土、浸透された地山(ローム層)。

第29図 第15号掘立柱建物址実測図

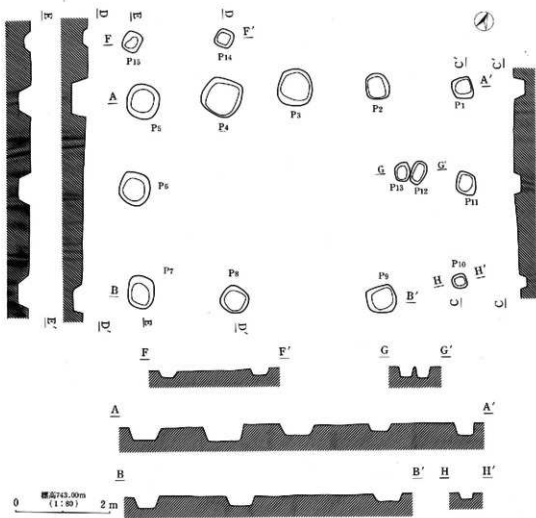


縮尺 1/100  
縦 213.9mm  
(1:100) 2m

- 1 10YR2/3.5 黒色土、その面が、砂質土、  
7.5Y R2/12.5 土、その面が、黒褐色土、  
少量含む。
- 2 10YR2/3.5 黒色土、その面が、砂質土、  
7.5Y R2/12.5 土、その面が、黒褐色土、  
少量含む。
- 3 10YR2/3.5 黒色土、砂質土、6.5mm以下のロー  
ンのコアム粒を多数に含む。
- 4 10YR2/3.5 黒色土、砂質土、数分  
された黒山(ローン層)。

第30図 第16号独立柱建物柱実測図





第31图 第17号独立柱建物址实测图

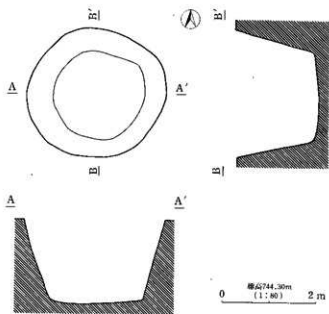
### 第3節 井戸址

#### 第1号井戸址 (第32~33図)

本址は、調査区北端中央部で検出された。他遺構との重複関係は有さない。東西-3m、南北-2.7mの円形を呈し、検出面から1.8mの深さを有し、逆梯形の断面形状を呈する。井戸枠等は存在しなかった。

出土遺物は極めて少なく、第33図-1が図化可能な遺物であった。偏平な擬宝珠つまみが貼付された須恵器の天井部である。

当遺跡の周辺部では、高速道路開発にともない数多くの調査が実施されているが、井戸址は検出例がほとんど皆無であり、貴重な発見である。



第32図 第1号井戸址実測図

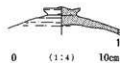
### 第4節 土坑

#### 第1号土坑 (第34図)

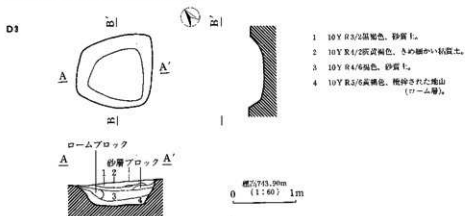
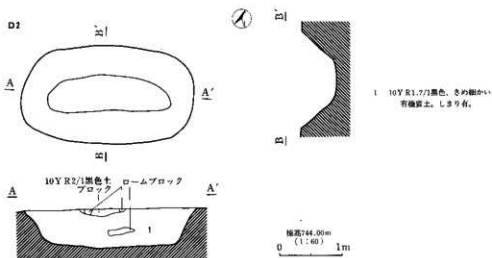
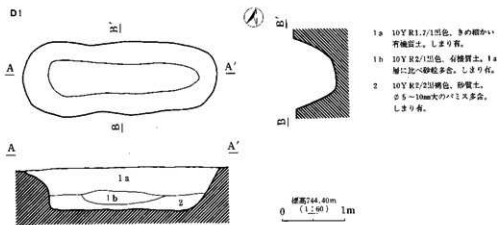
本址は、調査区北端中央部に位置し、第1号井戸址の2m南西において検出された。東西-3.1m、南北-1.2m、検出面から70cmの深さを有する。出土遺物は皆無であった。

#### 第2号土坑 (第34図)

本址は、第1号井戸址の南4mの位置で検出された。第1号土坑とは4m離れた場所に位置する。東西-2.75m、南北-1.6m、検出面から62cmの深さを有する。出土遺物は皆無であった。



第33図



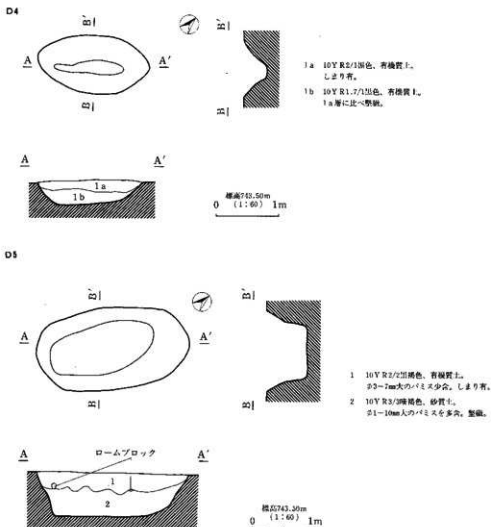
第34図 第1・2・3号土坑穴測図

### 第3号土坑 (第34図)

本址は、調査区北端部中央からやや西方の旧河川沿いに検出された。東西-1.2m、南北-1.1mの台形を呈し、検出面から38cmの深さを有している。出土遺物は皆無であった。

### 第4号土坑 (第35図)

本址は、第10・11・15号掘立柱建物址に囲まれるように、調査区中央から北西に20mの位置で検出された。東西-1.8m、南北-0.9m、検出面から38cmの深さを有している。出土遺物は皆無であった。



第35図 第4・5号土坑実測図

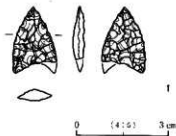
### 第5号土坑（第35図）

本址は、調査区中央から北西に12mの位置で検出された。東西-2.44m、南北-1.3m、検出面から70cmの深さを有する。出土遺物は皆無であった。

以上、今回の調査で検出された5基の上坑についてその概略を記した。これらの内、第3号を除く他の4基は共通の形態を呈している。それは、縄文時代の落し穴に極めて近似している。しかし、底面にはPitは認められないため、その性格については、現時点では不明と言わざるを得ない。

### 第5節 遺構外出土の遺物（第36図）

第36図-1に示した黒曜石製の石鏃が一点出土している。当遺跡周辺部では縄文時代の落し穴が数多く発見されており、縄文時代においては居住地域ではなく、狩場として当該地は利用されていたことが推測される。



第36図 遺構外出土石器実測図

## 第IV章 まとめ

### 検出遺構の時間的位置付け

今回の調査において検出された遺構は、竪穴住居址-2軒、掘立柱建物址-17棟、井戸址-1基、土坑-5基であった。この内、遺物の出土が認められたのは、竪穴住居址-2棟、掘立柱建物址-1基、井戸址-1基の計4ヶの遺構のみであった。

竪穴住居址は2軒ともにさしたる時間差は認められず、ヘラ切りの無台の須恵器坏・所謂「武蔵甕」ないしは「武蔵甕」的な甕の存在・丸底で非ロクロ成形の上師器坏等の特徴から、崑崙による、『前田遺跡』編年の第IV期に相当するものと考えられ、8世紀の第1四半期を中心とする年代が想定されている。

第13号掘立柱住居址の場合、手製の土師器1点。第1号井戸址の場合、須恵器の坏蓋1点のみの出土であり、これをもって所属時期を決定することは無謀であるが、第1・2号竪穴住居址と同時期の所産と考えられる土器ではある。

土器から目を転じ遺構の主軸方向・切り合い等から考えて見た場合、少なくとも3つのグループに分類できる。しかし、それが時間差としてどれくらいの幅をもつかは判断できかねる。また、建て替えが確認された掘立柱住居址の存在もあり、出土遺物の量は極めて少ないものの、それほど短時間に構築→廃棄された遺跡であるとも考えにくい。周辺部の様相が今後明らかになるのを待って明確な位置付けが成されるものとする。

最後に、本遺跡と田切りの谷を挟んで存在する聖原遺跡との関係、または、聖原遺跡と同様に田切りの谷を挟んで存在する芝宮遺跡群との関係は、ことさらに別遺跡として分離する必要はないように考える。確かに現在の地形は、これらの遺跡を深く広い谷により隔絶しているが、遺跡が存在した当時の田切りの谷の規模によっては、同一遺跡と呼べるほど密接な位置関係にあるのもまた事実である。

### 引用・参考文献

- 1987 前田遺跡 御代田町教育委員会
- 1990 年報1 佐久埋蔵文化財調査センター
- 1992 聖原遺跡II 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

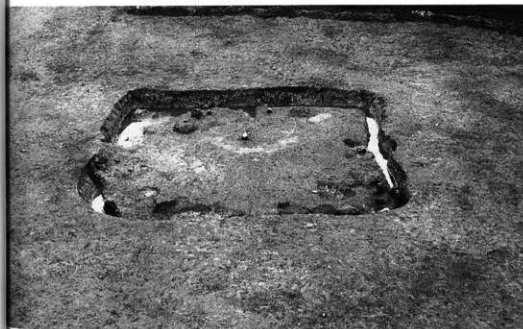


第1号住居址 (東方より)

第1号住居址 (南方より)



第1号住居址 (西方より)



第1号住居址  
カマド周辺部遺物出土状況



第1号住居址  
遺物出土状況

第1号住居址  
カマド芯材

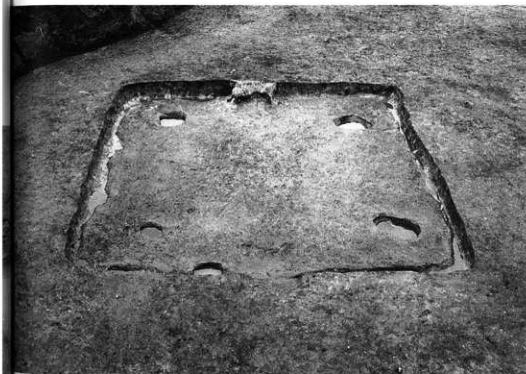




第2号住居址  
遺物出土状況



第2号住居址  
完掘（南方から）





第2号住居址遺物出土状況（北西より）



第2号住居址遺物出土状況（西より）

第2号住居址遺物出土状況（南より）



第2号住居址南西隅遺物出土状況（北東）

第2号住居址カマド周辺遺物出土状況（東より）→



第2号住居址カマド周辺遺物出土状況（南より）

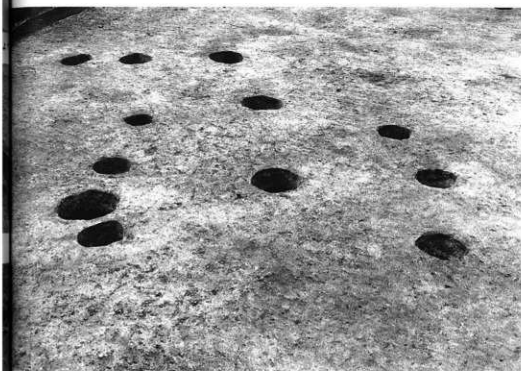


第2号住居址カマド完掘（南より）





第1号掘立柱建物址（北東から）



第2号掘立柱建物址（東から）



第2号掘立柱建物址P<sub>1</sub>セクション（西から）

第3号掘立柱建物址  
(北から)

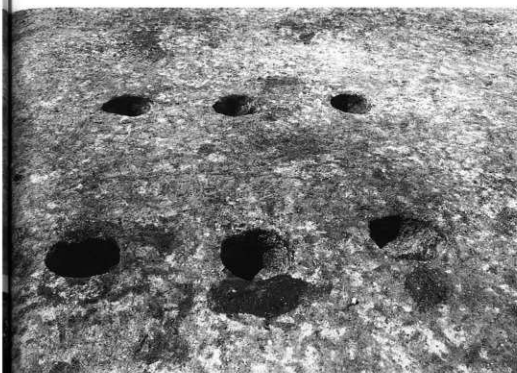


P<sub>3</sub>セクション  
(西から)



第4号掘立柱建物址 (東から)  
(西から)

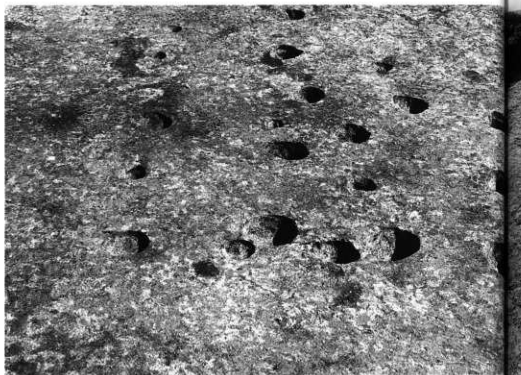




↓ 第6号掘立柱建物址セクション (東から)

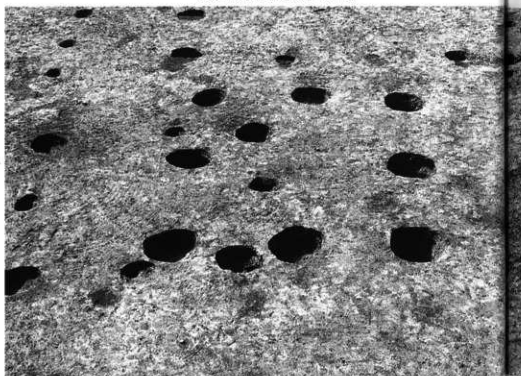
↑ 第5号掘立柱建物址 (南東から)





第7号掘立柱建物址 (南から) ↑

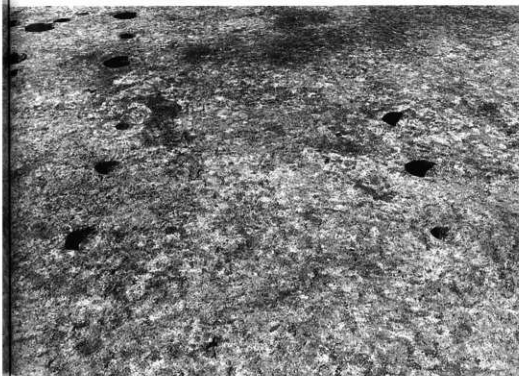
↓ 第8号掘立柱建物址 (南から)

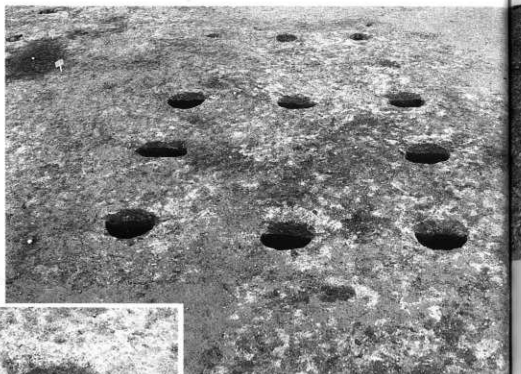




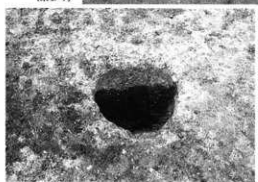
↓ 第10号掘立柱建物址 (南から)

↑ 第9号掘立柱建物址 (南から)

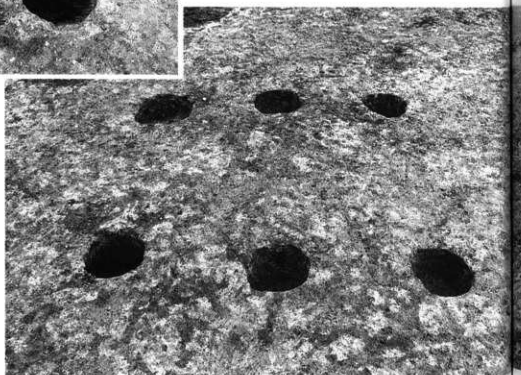




P<sub>3</sub>セクション  
(東より)



↑ 第11号掘立柱建物址 (東より)



↓ 第12号掘立柱建物址 (南から)



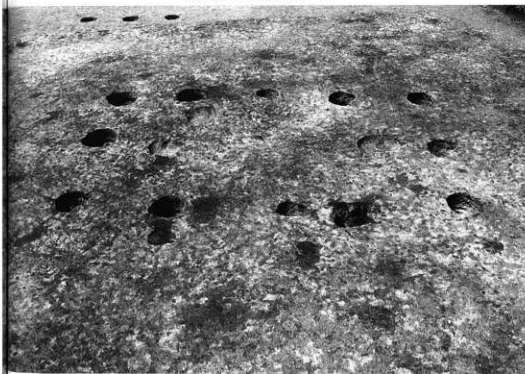


第13号掘立柱建物址 (東から)

P<sub>13</sub>遺物出土状況 (南から)



第13号掘立柱建物址 (南から)





第14号掘立柱建物址 (南より) ↑

↓ 第15号掘立柱建物址 (北より)



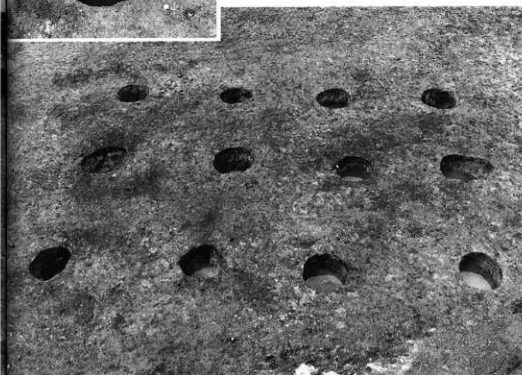


第16号掘立柱建物址  
(南より)

(西より)



P<sub>a</sub>セクション



(東より)



第17号掘立柱建物址 (北西より)

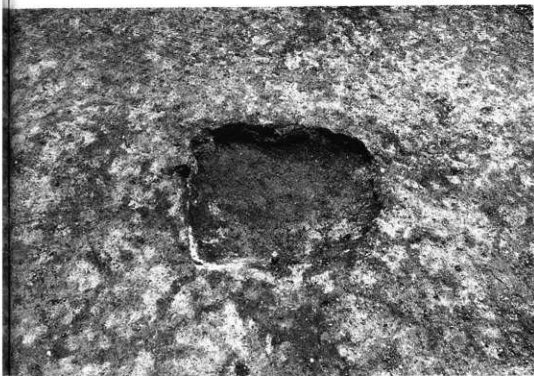
第1号土坑 (南より)





第2号土坑 (北より) ↑

↓ 第3号土坑 (東より)

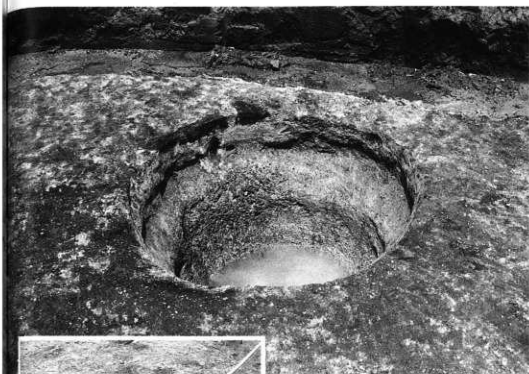




第4号土坑 (南より) ↑

↓ 第5号土坑 (東から)





第1号井戸址 (北より)



第1号井戸址セクション (北東より)

調査風景

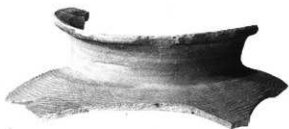




11-19



11-16



10-11



10-5



11-20





13-2



13-1



13-3



13-5



27-1



33-1

佐久市埋蔵文化財調査報告書

- 第1集 『金井城跡』
- 第2集 『市内遺跡発掘調査報告書1990』
- 第3集 『石附宮址群甲』
- 第4集 『大ふけ遺跡』
- 第5集 『立科F遺跡』
- 第6集 『上曾根遺跡』
- 第7集 『三貫塚遺跡』
- 第8集 『蔵の下遺跡』
- 第9集 『国道141号線関係遺跡』
- 第10集 『華原遺跡II』
- 第11集 『赤岸城外遺跡』
- 第12集 『岩宮遺跡II』
- 第13集 『上高山遺跡』
- 第14集 『粟毛坂遺跡』
- 第15集 『野呂久保遺跡』
- 第16集 『石並城跡』
- 第17集 『市内遺跡発掘調査報告書1991』

---

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第18集

西曾根遺跡

長野県佐久市岩村田西曾根遺跡発掘調査報告書

1992年3月31日

編集 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

発行 佐久市土地開発公社

佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

〒385 長野県佐久市大字志賀5953

T E L 0267-68-7321

印刷 榊佐久印刷所

---